



旅人のなやみ



haru



目次

旅人のなやみ	1
--------------	---

旅人のなやみ

ここはハート王国。

ハート王国の王様は心がホカホカ、あたたかい王様です。

ある日、いつものようにさんぼをしていると、身なりのまずしい旅人に会いました。

やせて、今にもたおれそうだったので、王様は旅人をおしろにまねき、食事をあたえ、おふろにも入れてあげました。

旅人はとてもかんげきして、王様に言いました。

「王様、本当にありがとうございました。

どこの国に行っても、このようにしてもらったことはありません。」

王様はニコニコして言いました。

「わしは、とうぜんのことをしただけじゃよ。

しかし、このあと、どうするのかね。

まだ旅をつづけるのかね。」

「はあ...。」

旅人はしばらく考えていましたが、言いました。

「王様、わたしは、”生きがい”をさがして旅をしているのです。

ですが、どこへ行ってもなっとくのいくこたえが見つかりません。

でも、王様のそばなら、何かこたえが見えそうな気がします。

わたしをおしろではたらかせてもらえないでしょうか。」

王様はニコニコして言いました。

「もちろん、かまわんよ。

それでは、わしのさんぼのおともをたのもう。」

「本当ですか！ ありがとうございます。」

旅人は、次の日から毎日、王様のさんぼのおともをしました。

王様は、さんぼで国民に出会うと、必ず声をかけました。

「おお、カラスのカー。ひさしぶりじゃの、元気になっておったかの？」

「やあ、シン。森のレストランはうまくいっておるかの？」

「おや、リスのスー。このあいだはたんじょうびプレゼントをありがとう。」

国民は、王様と話す、みんなニコニコ元気になっていきました。

旅人は、そのようすを見て、毎日感動してすごしました。

ある日、さんぽをしながら、王様は旅人に聞きました。

「さんぽのおともをしてもらって、もう1か月になるのう。

どうかね、何か”生きがい”のヒントは見つかったかね？」

旅人は言いました。

「はい、王様。

わかったことが1つと、わからないことが1つできました。

わかったことは、王様のように人をはげます生き方が、どんなにすばらしいかということですよ。」

「ほう、そうかね。

それで、わからないことは何かね？」

「はい。

わたしも、王様のような生き方をしたいと思うのですが、はたして、わたしに、王様のように、人をはげますしかくがあるのか、ということです。」

「ほう。」

「わたしは、びんぼうな家の出身で、王様のようにりっぱではありません。

学校もろくに行けなかったので、勉強もできません。

体も弱く、病気がちです。

こんなわたしにはげまされても、だれもうれしくないと思うのです。」

「ふむ。はげますしかく、のう。」

「はい。」

王様は、しばらく考えていましたが、言いました。

「ヒントになるかわからんが、わしが心がけておることがひとつある。」

「それをぜひおしえてください。」

「うむ。

それは『わかってあげる』ということじゃよ。」

「わかってあげる…。それだけですか？」

「うむ。何をせずとも、話を聞いてわかってあげるだけで、みな、ずいぶんと元気になってくれるのじゃよ。

みなが元気になるすがたを見れば、わしも幸せな気分になるのじゃ。」

「なるほど…。」

うでをくんで考えこむ旅人に、王様は言いました。

「旅人どの、あなたはさっき、びんぼうで、勉強もできず、病気がちと言ったのう。

それは、うらをかえせば、そういう人たちの気持ちをわかってあげることができる、ということじゃないかのう。」

「ええ、それはもう、だれよりもわかると思います。」

「それは、わしにはできぬことじゃ。」

あなたにしか、できないことじゃよ。」

旅人は、ハッと顔を上げました。

「で、では、わたしにも、人をはげますしかくがあるということでしょうか！」

「うむ。

そして、わしは思うのじゃが、あなたが、びんぼうをのりこえよう、勉強も今から少しでも身につけよう、体もじょうぶになるために努力しようとするれば、そのすがたそのものが、同じなやみをもつ人たちの希望になるのではないじゃろうか。」

それを聞いた旅人は、目を見開きました。

「ああ！なるほど！

わたしが、自分に負けずに、がんばろうとするすがたそのものが、人をはげますことになるのですね！」

旅人は目をかがやかせて言いました。

「王様、わたしは今まで、びんぼうであること、勉強ができないこと、病気がちであることをうらんでばかりいました。

でも今、王様の話を聞いて、びんぼうだからこそ、勉強ができないからこそ、病気がちだからこそ、わたしにできることがあることを知り、うれしくてなりません。

もう旅はやめます。

そして、ふるさとの国へ帰り、同じなやみをもつ人のために生きていきます。」

旅人は、王様にあくしゅをもとめました。

王様はその手をやさしくにぎって言いました。

「そうかね。さんぼのおともがいなくなるのはさみしいが、それがよいのう。」

王様は、旅人をニコニコ見送りました。

数年後、旅人から王様に手紙がとどきました。

そこには、国に帰ってさっそく、同じなやみをもつ人たちにどんどん声をかけて、友だちがたくさんできたこと、その人たちとはげましあって、たくさん勉強し、体をきたえ、会社をつくって、びんぼうをぬけだしたことが書いてありました。

そして今では、いろいろなやみをもった人たちがそうだんにおとずれるようになったので、「わかってあげる」ことに全力をつくしていること、その人たちが元気になるすがたを見るのが何よりの”生きがい”になったことが書いてありました。

そしてさいごに「王様に教えていただいた、『なやみがあるからこそ、人をはげますことができる』ということ、これからもひとりでも多くの人に伝えていこうと思います。」と書かれてありました。

王様はニコニコうれしそうにその手紙を読むと、今日もまたさんぼに出かけていくのでした。

旅人のなやみ

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
